

## 市民公開連携シンポジウム 「獣医師の社会的役割と、その教育の今」開催される

平成 29 年 12 月 9 日（土）、東京大学農学部弥生講堂において、全国大学獣医学関係代表者協議会及び公益社団法人日本獣医学会の主催、本会の共催による市民公開連携シンポジウム「獣医師の社会的役割と、その教育の今」が 132 名の一般来場者、10 社 12 名のマスメディア関係者の参加を得て開催された。

開会にあたり、主催者から、稲葉 陸 全国大学獣医学関係代表者協議会会長、久和 茂 公益社団法人日本獣医学会理事長による挨拶の後、共催者である本会から藏内勇夫会長による挨拶が述べられた。

### 【公益社団法人 日本獣医師会 藏内勇夫会長挨拶】

全国大学獣医学関係代表者協議会と日本獣医学会の主催による連携シンポジウムに多くの皆様にご参加いただき、ありがとうございます。本日の話題である獣医師を代表し、日本獣医師会会長として一言ご挨拶を申し上げます。

「獣医師の仕事」は多岐にわたっています。犬や猫などの家庭動物や牛・豚・鶏などの家畜や家禽の診療のほか、実に幅広い分野をカバーしています。たとえば、家畜伝染病を予防する家畜防疫の分野や、狂犬病などの人と動物の共通感染症予防、食品の安全を守るための食品衛生監視の分野、さらには動物愛護管理や野生動物対策の分野などがあります。このほか動物園や水族館、大学などの教育や研究機関、また製薬分野で活躍する獣医師なども含まれます。

世界獣医師会では、獣医師の仕事を市民の皆様幅広く理解いただくため、毎年「世界獣医師の日“World Veterinary Day”」というイベントを開催し、獣医師の活動の広報を行っています。日本獣医師会でも、2007 年から毎年秋に「動物感謝デー」というイベントを開催し、日本版“World Veterinary Day”として広報活動を行っています。

獣医師の職域、また、獣医師が果たすべき役割についてご理解をいただくことは、日本獣医師会の大切な活動の一つです。このたび、その機会として、シンポジウムを企画・主催いただいた全国大学獣医学関係代表者協議会と公益社団法人 日本獣医学会の皆様には厚く御礼申し上げます。

さて、獣医師の役割を考えると、今日、そのキーワードとなるのが“One Health”です。“One Health”

とは、「人の健康」、「動物の健康」、そして「環境の健康・保全」は密接につながっているとする概念であり、持続可能かつ安全で安心して過ごせる社会の構築に不可欠なものとして世界中で取り組まれています。

たとえば、エボラ出血熱や狂犬病など、地球上には人類に危険を及ぼす感染症が幾つもあり、その多くが人と動物の間で伝播する共通感染症です。また、これらの病気に対しては、獣医師と医師が連携して対策を講じる必要があります。日本獣医師会の活動指針である「動物と人の健康は一つ。そして、それは地球の願い。」は、まさに“One Health”の概念です。獣医師は、その知識や技術を活かし、動物の健康を守り、人と動物の共通感染症対策や生物多様性の保全などあらゆる分野の専門職と連携して“One Health”の推進のために努力しています。

日本獣医師会は、昨年 11 月、世界獣医師会、世界医師会及び日本医師会と連携し、4 者の共同主催による「第 2 回 世界獣医師会—世界医師会“One Health”に関する国際会議」を福岡県北九州市において開催しました。このとき調印された「福岡宣言」は、今後の“One Health”推進の礎として高く評価されています。2004 年、ニューヨークにおいてこの概念が提唱された「マンハッタン宣言」から、実に 12 年を経て、ようやく概念から実践へと移行する宣言が取りまとめられたのです。

この宣言には、「獣医学教育の改善・整備を図る活動を支援する」ことが掲げられています。獣医師が、国民生活に幅広く貢献し続けるためにも、将来を担う人材を育成する教育が重要です。

日本獣医師会は、これまで約半世紀にわたり、文部科学省をはじめ獣医学系大学等多くの関係者とともに獣医学教育の国際水準化達成に向けて尽力してきました。6 年制教育の実現、標準的カリキュラムの策定、教育の質保証としての第三者評価の実施等、実を結んだ成果も少なくありません。しかしながら、国際水準化の達成にはいまだ道半ばと言わざるを得ません。引き続き国民の皆様のご理解とご支援をいただきつつ、努力を続けてまいります。

本日のシンポジウムが、今後におけるわが国の獣医学教育の発展に向け、社会の幅広いご理解とご支援をいただく第一歩として、大きな役割を果たすことを期待しています。

## 【講演】

はじめに、基調講演として、河岡義裕 東京大学医科学研究所教授、米国ウイコンシン大学教授から「新興感染症 ―インフルエンザ並びにエボラ出血熱―」として、インフルエンザウイルスを人工合成する遺伝子操作系（リバーズ・ジェネティクス）技術を用いた、高病原性 H5N1 ワクチンの作製やパンデミックウイルス出現のメカニズムに関する研究の紹介とともに、エボラウイルスの基礎研究並びにワクチンの開発の紹介、さらに 2013 年の暮れに西アフリカにおいて始まったエボラウイルスの流行について、現地シエラレオネでの研究活動の様子が紹介された。これらの最先端の研究を行っている研究グループのメンバーは獣医師であることから、感染症対策の分野で獣医師が国際的に大きく貢献していることを来場者に印象付けるものとなった。

次に、佐藤晃一 山口大学共同獣医学部教授から「わが国における獣医師の職域：獣医師免許と獣医学」として、獣医師・獣医学教育の歴史や、獣医師の職域の多様性と獣医師免許制度が説明された。諸外国との比較において、職域間のバランスや獣医師養成機関の在り方、免許制度の違い等が紹介され、国際性を担保しながらも、日本の職域の特徴を考え、どのような獣医師を育てる必要があるのか、そのためにどのような教育をしていかなければならないのかについて紹介された。

続いて、稲葉 陸 北海道大学大学院獣医学研究院・獣医学部教授、全国大学獣医学関係代表者協議会会長から「わが国における獣医学教育改善：国際水準化に向けての現状と課題」として、わが国の獣医学教育と教育改善に向けたこれまでの取組が解説され、国際水準化に向けた現状と課題が紹介された。また、教育に携わる立場から「世界中どこにいても「私は獣医師です」と胸を張れる獣医師を養成しよう」との決意が示された。

続いて、高井伸二 北里大学副学長・獣医学部教授、特定非営利活動法人 獣医系大学間獣医学教育支援機構理事長から「獣医学実践教育強化の具体と公務員獣医師の確保への課題」として、文部科学省に設置された「獣医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議」取

りまとめに基づく獣医学教育改善の取組が紹介された。欧米諸国において獣医学教育の評価基準で重視されている、「Day One Competencies: 卒後すぐ何ができるか」をわが国でも実践するための参加型臨床実習と、産業動物診療獣医師及び公務員獣医師の確保に向けた課題と取組が紹介された。

休憩の後、倉園久生 帯広畜産大学副学長・獣医学研究部門教授から「欧米における獣医学教育の現状と認証評価制度」として、日本と欧米の獣医学教育の比較をもとに、北米と欧州の獣医学教育認証評価制度が解説された。また、北海道大学と帯広畜産大学の共同獣医学課程が平成 31 年度の取得を目指している欧州獣医学教育確立協会（EAEVE）による獣医学教育認証制度が紹介された。

最後に、中山裕之 東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部教授、公益社団法人 日本獣医学会前理事長から「将来における獣医師への期待と獣医学教育の在り方」として、まず、2017 年度に本評価が開始された大学基準協会による獣医学教育の第三者評価が説明された。さらに獣医師の役割と「One Health」の概念、獣医師を取り巻く国際的状況、将来に向けて、社会が獣医師に期待するものがまとめられ、卒業後すぐにグローバルに活躍できる獣医学分野の人材の育成こそが、獣医学教育が目指すべき目標であること、英語による教育の実施の必要性が示された。

すべての講演後、講演者 6 名をパネリストとして総合討論が行われた。オランダ・アムステルダムにおいて開催された世界獣医師会（WVA）評議員会にアジア・オセアニア地域評議員として参加した本会の酒井健夫副会長に代わり、久和 茂 東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部教授、公益社団法人 日本獣医学会理事長が座長を務めた。会場からの活発な質問に対し、各パネリストが回答した。

最後に、谷山弘行 酪農学園大学理事長、一般社団法人 日本私立獣医科大学協会会長による閉会挨拶が行われ、シンポジウムを終了した。



主催者挨拶：稲葉 陸 全国大学獣医学関係代表者協議会会長



主催者挨拶：久和 茂 日本獣医学会理事長



共催者挨拶：藏内勇夫 日本獣医師会会長



基調講演：河岡義裕  
東京大学・米国ウイ  
スコンシン大学教授



佐藤晃一 山口大学  
教授



稲葉 陸 北海道大  
学教授



高井伸二 北里大学  
教授



倉園久生 帯広畜産  
大学教授



中山裕之 東京大学  
教授



総合討論で会場からの質問に耳を傾けるパネリスト



閉会挨拶：谷山弘行  
酪農学園大学理事  
長・日本私立獣医科  
大学協会会長